



2017.11

vol.207

(演劇コンクールより)



## さあ、心をつなごう

学校長 飯山 等

9月の大谷は「動」。夏の熱気がまだ続く中、高校の学園祭・中学の演劇コンクール、そして中・高の体育大会と、熱い情がキャンパスに満ち、まさに大谷の校歌が謳う「これぞ学び舎 ああ たのし」(1番)、「これぞ友だち ああ ゆかし(心惹かれる)」(2番)そのままに、学校って楽しいな!友だちっていいな!との思いを身体全体で感じさせてくれた時となりました。集うこと、共に在ること、互いに思いを感じ合うこと、この愉しさと心惹かれる想いが、一人ひとりの心に味わい顔される。そして、私は私たちの中で初めて私になる、私たちの中にあつての私であると、私の中に豊かな《たち》を感じる、その場と時の確かさと尊さを発見して、《この時》を、《この場》を出立地とする歩みを始める。そして、《この時》《この場》が「これぞ古里 ああ うれし」(3番)、「これぞ安らぎ ああ やさし」(4番)と、つねにどのようなときにもはたらき続けてゆく。《この場》に受容され、《この時》を初めとする私が生まれる。人生の時の後に至っても、大谷から、《この時》《この場》から、自らを不断にrespect(振り返って見る=尊敬する)の原義)し、文字通り、人の憂いに寄り添う優しさを力として、いかなるときも安心して生きてゆく。《大谷の時》、「これぞ!」「ああ!」と自ら声にし、友の思いに共感してきた、その歴史が現在(いま)に脈々と継承されている。大谷の現在(いま)をこの歴史の瑞々しい先端として受けとめて、現在を、そして未来を、その歴史に応え得るものとして創出してゆかねばと強く思ったことでした。

正直に言えば、私自身ご縁をいただいて以来、ただ聞き流し歌い流していただくと告白せざるを得なかった校歌、単なるその一節でしかなかった詞が、皆さんの生き生きとした生のシャワーを浴びて、私の胸に飛び込んできて、大谷の歴史を、大谷が大切にすべき真心をあらためて考えさせ、感じさせてくれました。ありがとう。

その熱い気が充ちるキャンパスに身を置いて私の気持ちも火照っていたとき、神戸に住んでいる娘がこの11月に2歳になる子の保育園の保護者便りを送ってくれました。それを読んで、いのちの淳朴な、生きることの原点に出会ったような気持ちになりました。紹介します・・・「手をつないで、さあ、心をつなごう😊 以前から、月齢の高い子は、その日の気分で気の合う子同士、自然に手をつないであそぶ姿が見られました。そして、ひと夏を終え、ようやくリス組で最年少のKちゃんも、立って身体を安定させて友だちと手をつなぐことができるようになりました。春の時点では、まだまだ歩くこともままならない抱っこ星人だったKちゃんが、今では音楽をかけると、両どなりのお友だちの手をサッと握って満面の笑みで全身を使って喜びを表現するのです。」・・・人が2本の足で立つのは、手をつなぎ合うため!! 光がやわらかく胸に射し込み、周りがやさしい光に満たされたように感じました。4月当初お母さんと別れるのが辛く悲しく、ひたすら独りであり続けたその場と時は、今、心を解放し、つなぎ合う喜びに満ちた時と場となっているようです。大谷に身を置くすべての私たちにとっても、大谷がいつもそのように心をつなぎ合い、成長し合う時と場であるようにと、心して歩んでいきたいと思っています。